

山の百名花

講師 鈴木 淳

【1】水芭蕉

夏が来れば思い出すのは、尾瀬と水芭蕉らしい。今年の夏は尾瀬に行き、水芭蕉に会いに行くという人の話をよく聞くと、いまだ一度も水芭蕉を見たことはないという。それでも夏にはまず尾瀬と水芭蕉を思い出すらしい。

以前、岩手県に観光で行った乗り合いバスの休憩地で、裏山の林の中にこの花の大群落を見たことがある。見渡す限り咲き誇るこの花の名前を残念ながらその時の私は知らず、初めて見る変わった形の花に、色々な花があるものだと感心していたくらいであった。それがかの有名な水芭蕉であると知ったのは走り始めたバスの中だった。

そんな出会いのこの花はその後、時期さえかなえばこんなところにも？という場所にいくから見つけることができるのだが、脳裏に摺り込まれたイメージは尾瀬の朝もやの中に咲く白い水芭蕉となってしまっているのだろう。簡素で白い色が日本人のメンタルに合わない訳がない。そんな花が霧の中で心細げに人待ち顔でたたずんでいるのを見れば誰だって抱きしめたくなるだろう。それが、水芭蕉は尾瀬でなければいけない理由なのだと思う。そして一度でもそんな

な想いを抱いてしまったが最後、どこにいても夏の気配を感じ始めるとあの子たちに会いたい、会いに行かねばという思いが頭の中にムクムクと湧いてきて、矢も盾もたまらず「尾瀬に行こう」ということになるのだろう。白い色は心の気持ちにあこがれを思い出させるのだろうか、「そりやお前さん、惚れたってことさ」と、後ろから肩越しに声を掛けられた気がしつ、私は今年も尾瀬に行く。



【2】石楠花

山に登り始めて間もない頃、しゃくなげの森で迷ったことがある。大弛峠から金峰山への道でのことだった。登山道から垣間見えたしゃくなげの花の色に私たちは思わずその森に分け入ってしまったのだ。人の背丈よりも高いところに咲く紅い花は、降りそそぐ日の光に微妙に色を変え、形を変えこっちだよと誘っているように思えた。私たちは何のためらいもなく誘われるまま

にどんと森の奥に入り込んでしまい気づいたときには密生するしゃくなげの枝に阻まれ元来た道も分からなくなっていた。あつちだ、こっちだとあせって散々になろうとする仲間のザツクの端をつかんで、全員で動かないとあぶないと、大声を出す自分の声が喉の奥でかわいた声になっていたのを覚えている。

枝をかき分けすり傷だらけになってそこを脱出したのは、それから40〜50分してからだったろうか。あやしい花の魅力に誘われて悪い夢でも見たような気持ちになって私たちは休むこともなく足早にその場を立ち去った。

今年5月、百名山をめざすYさんと八経ヶ岳をご一緒した。前日までしとしと降っていた雨は、嘘のように上がり初夏を思わせる青空、乾いた涼しい風の中を私たちはぐんぐんと登った。道は紅い花をつけるしゃくなげの林の中に続き、手の届くところに花が見えるようになった。出始めの若芽の中に先がけて咲く紅い花は瞳をそらさずりんとしてこちらを見つめる美人のように、相変わらず美しく思わず足を止めて見とれてしまった。山から下りる風に大きくゆれたしゃくなげにふと我に返ると、相変わらずねと笑われた気がした。私にとってしゃくなげはそんな花である。